

医学専門学群における外国語教育について

山根一秀
臨床医学系教授

はじめに

近年、国際的に情報を発信し収集するために必要不可欠な外国語の重要性が以前にも増して認識されてきたのにもない、外国語の教育法について様々な議論がなされています。

医学専門学群においても外国語教育を重視し、4年次への進級要件として第1外国語(英)、第2外国語(独、仏)の履修に加えて2年次、3年次に医学専門学群又は外国語センター開設の外国語(自由選択)を1.5単位履修することが義務づけられています。本稿では、主として筆者が直接関与したことに基づき医学専門学群における外国語教育について考えてみたいと思います。

外国語教育の目標

医学専門学群では卒業時点における到達目標を大要次のように設定しています。

- ① 外国の現代文化とその背景を理解するための外国語の基礎を修得する。
- ② 医学・医療分野における情報交換のための外国語の理解力と表現力を身につける。

目標に到達するための具体的な学習目標としては、英語の場合、

- ① 話すこと
 - イ 自分の意思を表現できる。
 - ロ 討議することができる。
 - ハ スピーチができる。
 - ニ 診察における基本的な問診ができる。
 - ホ 医学・医療分野の問題について、意見を述べることができる。
- ② 聞くこと
 - イ 相手の話すことが理解できる。
 - ロ 映画・放送及び一般的講演を聞いて大筋が理解できる。
 - ハ 医学・医療分野の講演を聞いて理解し、要旨をまとめることができる。

る。

(3) 書くこと

- イ 手紙及び履歴書が書ける。
- ロ 自分の考えを書き表すことができる。(Creative Writing)
- ハ 一般的なレポートが書ける。
- ニ 診療における身体所見の記述ができる。
- ホ 症例報告が書ける。
- ヘ 医学論文を書くための基本的な文章表現ができる。

(4) 読むこと

- イ 代表的な一般雑誌、新聞の論説が読める。
- ロ 自然科学、教育、社会、政治問題に関する一般的な論文が読める。
- ハ 医学・医療分野の教科書、論文が読める。

(5) ECFMG 試験（米国に医師として留学する際に課される資格試験で、臨床医学能力と英語力を試す試験）に合格すること。

英語以外の外国語に関しては初級、中級に分けて、別に目標が設定されています。

外国語教育の現状

医学専門学群では上記の外国語教育目標の達成に向けて、外国人教師や学群教

官による専門外国語の授業が開設されています。学群教官の場合は、主として外国留学の経験のある教官によって行われる少人数制の授業で、各教官の専門とする医学分野を背景として外国語教育が行われています。開設されている外国語としては、英語、ドイツ語、フランス語があります。

授業の進め方やテーマは各教官によって異なりますが、教材として各専門分野の医学教科書を使う授業、論文を使う授業、臨床医学の会話を中心とする授業等があります。

具体的な授業の一例として、筆者が平成5年以來行っている専門外国語「英語」について紹介したいと思います。

授業のタイトルは「NEJM (New England Journal of Medicine) のCPC (Case Records of the Massachusetts General Hospital) を通して病歴の書き方、臨床的思考法を学ぶ」というものです。NEJMは世界で23万人に購読されている最も名声の高い週刊医学雑誌で、世界中のメディアが医学記事を報道するとき種本として用いている雑誌です。上記のタイトルにした理由は二つあります。一つは、筆者のアメリカ留学時の指導教官から、外国人医師が医学英語と英会話を学ぶにはNEJMのCPC欄を声を出して読むのが良いとア

ドバイスされたことによります。二つは、最初に患者の病歴が示され、次に症状・診察所見・検査所見を分析して診断に至るまでの系統的思考過程や治療法が示されているこのCPCを解説し学生とともに考え、医学用語の実際の発音を示すことによって、医学生が必要とする英語に関する全ての要素を修得させることができると考えたためです。また、授業に際して心がけたことは、医学生に参考になると思われる留学時の体験談を話すことによって生きた医学英語を伝えるということです。

評価と今後の改善点

履修した学生の授業への反応は良好で、その理由としては次の点が考えられます。

- 1) 臨床医学へ進むにしても基礎医学に進むにしても、将来の自分の仕事と密接な関係がある医学英語が学べること、
- 2) 医学用語の発音は特殊なものが多く、本による独習では学習困難であり、授業で留学経験のある教官を通して初めて学べること、
- 3) アメリカ留学へのあこがれがある学生にとって、留学生活についてのヒントを学べること、

外国語の教育法には、外国語を専門とする教官によるものと、各学問領域の教官が自分の専門領域を通して外国語教育を行う専門外国語方式がありますが、外国語が特に堪能な教官によってなされた場合、専門外国語方式は極めて有効な教育法であると考えられます。

今後の改善点として感じたことは、現行では4年次への進級要件としているために基礎医学を中心に勉強している2年次や3年次に外国語の必要単位を取ってしまい、4年次以降の外国語の勉強がおろそかになるため、5年次への進級要件とした方が臨床医学の授業が入ってくる4年次に臨床と関係の深い医学英語も履修することになり、より良いカリキュラムになるのではないかと考えられます。

国際交流

医学専門学群では、'84年度からNew Castle U. (オーストラリア)、'86年度からMcMaster U. (カナダ)、'90年度からU. C. Irvine (アメリカ)との交流を行っており、これらの大学で毎年約5名の6年次学生が一定の期間実習しています。海外実習学生は、外国人教師による語学試験、国際交流委員会主催による面接試験、学群成績、TOEFL成績等を参考に選考されています。面接試験では面

接委員と学生による質疑応答が英語でなされていますが、近年の学生の英語力、特に討論能力の向上には目をみはるものがあります。最近、医学専門学群の英語入試ではヒアリングも課されていますので、今後の学生はさらに英語能力が向上

することが予想されます。専門外国語の学習が海外実習に役立っている側面もあり、両者は外国語教育において相乗効果を示すものと考えられます。

(やまねかずひで 内科学専攻)

